

カルチャーショックの効用

公益社団法人 日本経済研究センター
研究本部副部長兼主任研究員

伊藤 由樹子



昨年3月まで約2年間、公務員をしていた。内閣府大臣官房統計委員会担当室で、統計委員会という審議会の事務を担当したのである。統計委員会とは、公的統計について、専門的で中立的な立場から審議を行う機関である。私の在任中に、肥大化した内閣府をスリム化することが決まり、現在は総務省に置かれている。

さて、公務員として働き始めると、それまで半世紀ほど生きてきて、世の中のことが少しは分かっていたつもりでいたところへ、大きなカルチャーショックを受けることになる。元々勤めていた民間のシンクタンクは、60人程度の規模のフラットな組織だ。それと比べて、官庁はヒエラルキーのある大組織

で、業務は法律で規定されている。仕来たりも違うし、耳慣れない業界用語も多い。しばらくは、「それはどういう意味ですか」「なぜこうなっているのですか」「どうして〜してはいけないのですか」と、まるで幼児のように、言葉の意味や疑問を投げかける毎日であった。周りの人はさぞ大変だったろうが、幸いにも私の周りには忍耐強い人が多かった。理解するまで、一つひとつ丁寧に教えてくれた。

その後、事あるたびに何とかしなければとモガクことになるのだが、今にして振り返ると、この別世界での新しい経験は、ともすれば怠けがちな私の脳を働かせるよいきっかけとなっ

た。それまで理解していると思っていたことでも、様々な体験を経ることで、頭の中だけでなく、身に染みて合点がいったことは多い。

第一に、人にはそれぞれ役割があるということだ。民間では、特に私がいちような小さな組織では、新しい企画が生まれたり、あるいは何か問題が生じたときは、直ちに行動に移すことができる。しかも何から何まで自分でやる。しかし内閣府ではそうはいかない。予算や業務範囲などの枠がついて回る。民間人であった頃、担当していたプロジェクトの資金収集に駆け回ったことがある。その時は胃がキリキリ痛む思いだったが、自由に資金を集めて

実行することができるのは何とよいことかと思えるようになった。「公」でなければできないこともあるが、「民」だからこそできることもあるのだ。

統計の作成過程においても役割分担は重要だ。公的統計は、それを担当する各府省の人だけによって作られているわけではない。実地調査では、地方公共団体や統計調査員が重要な役割を果たしている。例えば、国勢調査では約90万人の統計調査員が、担当調査地域の地図と世帯名簿を作成し、調査世帯へ依頼して調査票を配布し、記入された調査票を回収して点検するのである。そして、そもそも調査対象となった企業や世帯など報告者の協力が得られなければ、正確な統計情報は得られない。さらに、社会や経済の実態を正確に映し出して、使いやすい統計を作っていくには、統計利用者(政策担当者、研究者、一般)の意見も欠かせない。これら作成者、報告者、利用者という関係者がそれぞれ為すべきことにおいて力を発揮していくことによって、経済社会の実態を正確・的確に映し出す統計が作られていくのである。

腑に落ちたことの第二の点は、自分なりの考えを持つことの大切さであ

る。一口に統計を改善するといっても、その方向性や望ましい形は必ずしも一つではない。作成者、報告者、利用者の中でも意見は千差万別である。そうした中で、自分の考えを持っていないと、あちらに流され、こちらに流され、困ったことになってしまふ。自分の意見を持つというのは非常に難しいことではあるが、最終的に国民のためによいかどうかという点を常に意識するようにはしていた。

第三は、心技体ということである。これは、しばしばスポーツ選手が口にするが、仕事をする上でも大事なことだと思う。せつかく高いスキルを備えていても、志がなければ、あるいは根気よく続ける強い気持ちがあれば、あるいは根気よく続ける強い気持ちは欠けていけば、その真価を発揮することはできない。一方、強い使命感を持ち高みを目指しても、スキルがなければそれを実現することは難しい。統計委員会の審議内容は専門的な要素が多く、また日本の統計制度は、各府省がそれぞれ担当の統計を作成しているため、体系的に整備するのが難しい面もある。その中で、たとえ達成が容易でないと思われたとしても根気よく、地道に学び続け、仕事に取り組むことの大切さを教

えられた。

統計の改善・発達に貢献した人を表彰する大内賞というものがある。長年、地元で統計調査員を務めてこの賞を受賞された方に、調査をするときのコツを聞いたことがある。すると、「しっかり自分で理解し、考え、そして行動すること」と仰った。理解することと、行動することの間に「考える」が入っていることに、なるほどと思った。40年、50年と調査員を続け、さらに後進の指導もしている方の重みのある言葉であった。そして、調査対象の方に直接して統計の大切さを伝えるこうした方々により、公的統計は支えられているのだと実感した。

冒頭に書いたとおり、今更、日本の国内で、このようなカルチャーショックを受けるとは思わなかった。けれども、こうしてみるとまだまだこの世の中は知らないことばかりに違いない。これから先、どんな新しいことが起こり、どんな人に会えるのだろうか。そのときはそのときで、また何とかするためにモガクことになるのだろうか、実は次のカルチャーショックとの出会いにワクワクしている。